（C）日刊スポーツ新聞社

2014.7.23→2020.7.24

毎週水曜日連載
NIKKAN SPORTS SPECIAL

100年構想の川淵氏が描く五輪の100年構想

300回超大連載 54回

2020年東京五輪開会式まで6年を切った、今日5日は東京のプレゼンをオリンピック日本招致開幕のちょうど1年前になる。日本サッカー協会最高顧問で日本バスケットボール協会の川淵三郎会長（78）は日刊スポーツのインタビューに応じ、Jリーグに続き五輪の100年構想・の私案を披露。高めるための施策を提言した。また、バスケットボールに続き、ハンドボール、バレーボール、ホッケーの日本協会の改革にも意欲をみせた。【取材構成・田口潤】

東京がゴールではない

13年9月、東京五輪・パラリンピックの招致が決定した。そのとき・川淵氏の胸をよぎったのは68年メキシコ五輪後の、苦い思い出だった。

「東京五輪を終着点にしてはいけない、64年東京五輪のサッカーがそうだった。次の（68年・メキシコ五輪）で銅メダルを取ったが、以来28年間、日本サッカーは、ずっと低迷した。今の国際レベルでは、初心者レベルに落ちてしまっている。そのレベルで派遣されるだけでは、スポーツを通じて相手の国の理解を深める機会にはならない。ただ、ためだけでは、意味がない。それぞれの国が応じて派遣されるだけでは、スポーツを通じて相手の国の理解を深める」

これらの「五輪一100年構想」を実施していくためには、各競技団体のガバナンスの強化が大前提になる。川淵氏は、5月から日本バスケットボール協会会長に就任、ボール競技の強化と活性化を図る立場として、ハンドボール、バレーボール、ホッケーの日本協会の改革に乗り出す。

「五輪終了から遠ざかる団体ボール競技はそれぞれ、特に男子バレーボールは、男女のハンドボールは、男子ホッケーの4つは問題がある。バレーはナショナルトレーニングセンターでの喫煙問題（禁煙区域で喫煙など）などもあるが、ホッケーは、